
ゆめにつき二次短編 まじょ 「箒が飛ぶ理由」

文月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆめにつき二次短編 まじよ 「筈が飛ぶ理由」

【Nコード】

N0464BA

【作者名】

文月

【あらすじ】

フリーゲーム「ゆめにつき」二次創作です。
エフェクト「まじよ」をテーマに。

「あら、窓付き」

振り向くと、声を掛けた少女がひらひらと手を振った。黒髪で輪郭を闇に溶かし、瞳を三日月型に歪めて微笑していた。

「また魔女ごっこしてるのね」

ささくれ立った箒から不器用に降りて、黒いロングスカートの裾を払う。竹の繊維が何本か、白黒の空気に舞った。

少女はそれをつまらなそうに眺めていて、ひとつ、欠伸をした。

「だからその、窓付き、っていうのは何なの」

「あなたのことよ」

「それは前も聞いたけど」

「窓付き」は、服と同じ色の尖り帽子を深く被り直し、それでようやく少女の隣に腰掛けた。

「何で私が？」

「それだって前も言ったじゃない。あなたの服に窓の模様があるからって……まあ、今日は無いみたいだけど」

「今日の私は『窓無し』？」

風がごう、と間を掠めて、華奢な身体を撫でて行く。暗闇のどこから風が吹いてくるのかと、窓付きはいつも不思議に思うのだ。今日の風は、雨の日の匂いがした。

「そう言う訳でもないわ。もし裸ん坊でも、あなたは窓付き」

唇に微笑みを湛えたまま目を伏せて、少女は言った。突風に煽られた艶のある髪が、まだ余韻を孕んでゆらめいている。

「良く分からないな」

呟いて、窓付きは微笑んでみようとしたり。少女のように上手くは出来なかったから、すぐにそれを掻き消して、一度乾いた唇を舐めた。

「ねえ、箒に乗せてよ。私も空を飛べるかしら」

少女の同じ笑みの色がくるくる変わる。

「そんなに良いものじゃないよ。痛いし擦れるし疲れる」

「好き好んでここまで乗って来て置いて、そんなこと言われてもねえ」

窓付きは首を傾げた。

「好き好んで……」

「なあに？」

「うっん」

闇色のスカートから伸びた足は唐突に白く、浮き上がって痩せて見えた。

「あなたには飛べないと思うな」

「どうして？」

「魔女がどうやって飛んでいるか、知ってる？」

「知らない。魔法を使うのかしら」

窓付きの薄い唇がほんのわずか、強張りで見紛うような笑みを浮かべたのを、少女は見逃さなかった。横目で見られていることに気づいているのかいないのか、窓付きは丁寧に瞬きをした。

「すこし、ちがう」

唇だけを注視していると、内臓の色をしたその器官は、音のひとつひとつを抱き締めていた。誰もとても気付きそうにない、密やかなはたらきだった。

「魔法なんて無いの。だけど、これはただの竹箒」

マジシャンのように箒を手渡しながら、窓付きは囁いた。

「箒を飛ばす力は確かに存在する」

「それはなに？」

内緒話でもするように二人の声には吐息が混じり、言葉は実体のない雨に容易く溶けていく。

窓付きはおもむろに口をつぐんだ。十分に足元を眺め回して、少女からまた箒を受け取り、抱き締めて目を閉じた。

「あなたが言ったことは、正しいと思うの」

少女は黙って頷いた。

「私かもしれない窓付きなら、それは着替えたくらいじゃ変わらないし」

頷く。

「私はきつと、心のどこかでそこまで分かっている、箒に乗るのは楽しいなあ、と思う」

頷く。

黒に覆われた窓付きの華奢な肩が、拙い台詞より多くを語っていた。

「好き好んで」

付け加えて、窓付きは背伸びをした。吐き出した息の重みが、喉から絞り出すような声になった。

「気持ち良いよ、真っ黒な服は」

「空を飛ぶのは？」

「うん。好き」

体温を帯びた少女の視線をこめかみに感じた。

「じゃあ、後ろに乗せて。あなたが飛んで」

窓付きはぽかんと口を開けた。無意識のうちに視線が合っていた。揺らがない笑顔を抗えずに見つめ返して、やがて窓付きは、息を抜くように苦笑した。

「仕方無いね」

「仕方無いのはあなたでしょう、窓付き」

返事はせずに箒に跨がる。不親切な柄が、もう熱をもった太股をまた引つ掻いた。何か言う前に、少女が背中にぴたりと密着したのが分かった。色のない体は、窓付きよりも冷たくはあったけれど、確かに血の通う感覚があった。

「ちゃんと跨がらないと振り落とすよ」

「窓付きに掴まるから平気よ。痛いのは御免だし」

横向きに腰かけて、少女は満足げな息を吐いた。

「ねえ、あの子らも連れていきましようよ。まだ箒は余っているし」

……トンネルへは近いはずよ、あの桃色の池へはあなたが良く行くでしょう」

「ひとり残らず落ちたって知らないから」

「その時はあなたも一緒よ、ねえ窓付き」

少女の口許が背中越しに耳に近付いて、冷たい息が肌をくすぐった。振り返らなくても、彼女が笑っているのは分かっていた。

「たとえそうだったって、あなたは窓付きなんでしょう」

「そうかもね」

短く返したつもりだったけれど、頬がかつと熱くなって、窓付きは箒の柄を強く握り締めた。

「四人も飛ばせるかな」

「さあね」

「無責任ね」

二人の足元に旋風が巻き起こり、少女が小さく声を上げたときには、箒はもう空中へ浮き上がっていた。激しい風が三つ編みと黒髪をはためかせてかき混ぜる。スカートの裾が軽快な音を立てる。

「雨が止んだね」窓付きは呟いた。

「え？」

「なんでもない」

冷たさを切り裂くように進んでいく箒を見下ろして、窓付きは他の少女たちを思い浮かべていた。飛べるだろうか。魔法とは別の力は。足がひどく痛む。いつしか微笑していた。

飛べるさ。

闇を脱した瞬間に強く照った光がいつまでも目尻に残っていた。顔に吹きつける風からは、初夏の香りがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0464ba/>

ゆめにつき二次短編 まじょ 「篝が飛ぶ理由」

2011年12月31日23時50分発行